

熊本地震後の励まし活動の企画・運営・実施方法に係る 知見と課題

門倉慧¹・梅本通孝²

¹ (株) 東京建設コンサルタント 東京本社 水管理本部 (kadokura-s22@tokencon.co.jp)

² 筑波大学 システム情報系 (umemoto@risk.tsukuba.ac.jp)

和文要約

文化芸術による被災者支援活動である『励まし活動』について企画・運営・実施に関する知識と経験を体系的に整理し、励まし活動を実施する上での知見と課題を明らかにすることを目的として、熊本地震後に励まし活動を実施したコーディネーターと活動者に対してヒアリング調査を行った。その結果に基づき、企画から実施に至る具体的な活動の流れに加え、被災地と励まし活動の特性、コーディネーター及び活動者の行動・判断、それを行う上で必要な要素の3項目の関係性から、熊本地震後の励まし活動における知見と今後の活動上の課題を明らかにした。

キーワード：励まし活動、文化芸術、コーディネーター、アーティスト、熊本地震

1. はじめに

(1) 背景

近年、大規模災害では被災者支援活動が盛んに行われ、さらに被災者の心の復興やケアも重要視されてきた。そのような被災者の心に関する支援活動の1つとして、被災地内外から避難所や仮設住宅、公共施設などを訪れ、公演や体験教室、語りかけなど、文化・芸術、スポーツに関する活動が行われている。門倉ら(2021)はこの活動を『励まし活動』と呼んだが、本研究でもそれに倣い、また、アーティストやスポーツ選手といった励まし活動を行う主体を『活動者』と呼ぶこととする。

活動者は普段の活動とは異なる被災地という特異的な状況下で、被災者の心の支援を目的とした活動が求められる。(表-1) ゆえに、励まし活動には多少なりとも普段の活動との違いや難しさによる試行錯誤が避けられない。

また、励まし活動は活動者のみで行われるだけでなく、被災者と活動者の間にコーディネーターが介在することがある。その場合、全体的な企画・運営をコーディネーターが担い、活動者は活動内容の検討や実演に専念できる。そうしたコーディネーターや活動者の経験や知識を蓄積できれば、上述の試行錯誤を低減しより良い活動の展開にも繋がると思われる。

災害支援ボランティアを行う際に大切なこととして、栗田(2006)は受け入れる側本位の論理を中心にすえた対応が必要であると指摘している。励まし活動でも受入先の状況に応じた活動が行われており、門倉ら(2021)

表-1 励まし活動と普段の活動との違い

	励まし活動	普段の活動
主な目的	被災者の心の支援	文化芸術・スポーツの普及
主な形式	アウトリーチ	アウトリーチ、公演
主な環境	被災者の生活空間 (避難所、仮設住宅、学校等) ・文化芸術・スポーツに は不十分な環境	文化芸術・スポーツに適 した施設や機材 ・文化芸術・スポーツに 十分な時間で準備された 環境

は、励まし活動を対象にした新聞記事調査により、会場や対象の被災者、提供方法など励まし活動の分類を行った上で、被災者の属性や求められる反応によって適した活動内容が異なることを明らかにしている。中村(2016)は、音楽ジャンルの励まし活動に着目し、表現の意味は活動内容のみならず活動環境や鑑賞者の記憶などの要素によっても決まると述べている。さらに、活動者やコーディネーターはそれらの要素に思いを巡らせ、その場に最適な活動を実現していると結論づけた。以上から、励まし活動のニーズや条件は受け入れ先や被災者によって多様であり、それらに適した活動内容が活動者やコーディネーターによって検討されているという実態が窺える。

秋山(2016)は、被災者のニーズと活動内容の間に生じた乖離を活動者が試行錯誤を重ねることで改善した経緯や、財政的な援助を受けられないといった励まし活動に関わる制度が不十分であると指摘した。また、門倉ら(2022)は、被災地の環境下では試行錯誤が必要であったこと、更に活動上の知見があるものの体系化や共有が

表-2 ヒアリング対象者

■コーディネーター

対象者名	実施日（時間）	場所	人数	形式	活動内容
熊本県立劇場	2021/7/28（210分）	熊本県立劇場	3	グループ	音楽、演劇、演芸等
芸術の都ACTくま100 ^{※1}	2021/7/28（90分）	サクラマチクマモト	1	1対1	音楽
Comodo arts project	2021/7/29（150分）	サクラマチクマモト	1	1対1	音楽、演劇、演芸等
SASHIYORI Art Revival Connection KUMAMOTO ^{※2}	2021/7/30（90分）	サクラマチクマモト	1	1対1	演劇

※1 地震後当時の名称はくまもと音楽復興支援100人委員会。略称：くま100。※2 略称：SARCK（さるくっく）

■活動者

対象者名（担当コーディネーター）	実施日（時間）	場所	人数	形式	活動内容
活動者A（芸術の都ACTくま100）	2021/7/30（210分）	KKRホテル熊本	1	1対1	音楽
活動者B（芸術の都ACTくま100）	2021/11/2（120分）	WEB会議	1	1対1	音楽
活動者C（Comodo arts project）	2021/12/12（120分）	WEB会議	1	1対1	音楽
活動者D（SASHIYORI Art Revival Connection KUMAMOTO）	2021/11/1（120分）	WEB会議	1	1対1	演劇
活動者E（SASHIYORI Art Revival Connection KUMAMOTO）	2021/11/3（120分）	WEB会議	1	1対1	演劇

されていないことを指摘した。これらの研究から、励まし活動にはニーズや目的に対する適切な活動内容の検討や活動環境の整備など、試行錯誤を要する作業や課題が認められる。

また、励まし活動と同じく被災地で行う心の支援活動である足湯ボランティアについて、本多（2018）は、足湯ボランティアの活動上の困難や課題について十分に論じられていない点を指摘し、活動経験談をもとに足湯ボランティアの実施にかかる課題を明らかにしている。励まし活動も足湯ボランティアと同様被災地という特別な環境下で被災者を対象者にしており上記のような課題が生じている。よって、励まし活動に関しても、課題を解決し、後の被災地において励まし活動を展開するという点で、コーディネーターと活動者の活動経験は、有用な知見となることが期待される。特に、コーディネーターは第三者的な立ち位置で多種多様な活動に携わるため、より客観的な視点に基づいた知見と課題が得られると考えられる。しかし、足湯ボランティアと同様、経験談に基づいた知見や課題について十分に論じられておらず、整理や体系化が必要であると考えられる。

(2) 研究目的

活動を行う側として励まし活動を提供する『活動者』とその運営・支援を行う『コーディネーター』の2者が存在する。両者は被災者と交流する中で、文化・芸術・スポーツの「力」のあり方を模索し、試行錯誤しながら活動していた。ゆえに、新たに災害が起き、励まし活動が必要とされた場合、その体制や運営、活動の実施について困難が予想されるため、事前に活動実施に関する知見や課題を共有しておくことが重要である。

そこで本研究では、将来の励まし活動の展開に資するべく、コーディネーターと活動者が持つ企画・運営・実施に関する知識と経験を体系的に整理し、励まし活動を実施する上での知見と課題を明らかにすることを目的とする。

(3) 研究の流れ

本稿の構成は次の通りである。2. でコーディネーターと活動者へのヒアリング調査について、説明及び基礎的

な結果の整理を行う。3. ではヒアリング調査結果の分析方法と分析結果を提示し、4. で最終的な結論及び今後の課題を述べる。

2. コーディネーターと活動者を対象とした励まし活動の企画・運営・実施過程に関する調査

本調査では、励まし活動の実現過程に加え、各過程における工夫点や課題点を把握すべく、コーディネーターと活動者に対してヒアリング調査を実施した。

(1) 調査対象

本研究では、多くの励まし活動が実施されていた災害の中で、比較的経過年数が少なく対象者が記憶をたどりやすい災害として熊本地震に着目し、同地震後に活動したコーディネーターと活動者を調査対象とした。なお、双方の視点から工夫点や課題点を把握するため、コーディネーターの対象者の選定後、そのコーディネーターとともに活動したことがある活動者を対象とした。（表-2）

被災地各地で行われていた励まし活動の実施状況を網羅的に把握することは困難であったため、まず、当時の励まし活動の実施状況を把握し、活動していたコーディネーターを探すべく、震災前から文化芸術活動の支援を通じて県内の文化芸術施設や団体と関わりを持つComodo arts projectへヒアリングを行った。その結果、計4団体がコーディネーターを行っていたことが明らかになった。各団体へ行ったヒアリングでは活動過程および工夫点と課題点を把握するために十分な経験の蓄積があることが確認でき、加えて他に活動していたコーディネーターは確認されなかった。よって、コーディネーターの対象者を活動実績が確認できた4団体とし、活動者の対象者をコーディネーターとともに励まし活動を行った活動者の中から、活動経験が豊富な活動者を選定した。

(2) 調査内容

2021年7月から11月にかけて行い、4団体6名のコーディネーター、5名の活動者に対し、筆頭著者1名でヒアリングを実施した。（表-2）

まず、活動過程を明らかにすべく、活動の発端から実施後に至るまでの一般的な活動の流れについて聞いた。

その際、行った行動・判断の理由やそれを実現した要素も併せて確認した。次に各過程における工夫点や課題点を明らかにするため、試行錯誤や苦慮があった個別事例を対象に、活動の中で得られた発見や気づき、困難だったことや課題として感じたことについて聞いた。

(3) 調査結果の基礎整理

本項では、3.での分析に先立ち、調査で得られた情報の基礎的な整理を行う。まず、励まし活動の特徴や各団体の特徴などの対象者の基本情報、本調査の目的である励まし活動の企画・運営・実施過程、工夫点や課題点についてまとめた。特に活動者については、主体的に携わる当日の活動内容の検討と当日の活動実施方法における工夫点や課題点について取り上げる。

a) 励まし活動の特徴

対象としたコーディネーター団体のうち、2団体は音楽、演劇の各ジャンルのみを行っており、他2団体は文化芸術に属する複数のジャンルを行っていた。また、音楽ジャンルの活動は鑑賞、演劇ジャンルの活動は傾聴や身体的なコミュニケーションを主としていた。

b) コーディネーター団体の特徴

まず、運営主体は県の公共ホール、広報誌の作成やコーディネーターなど普段から文化芸術の支援を行う団体、震災後に励まし活動や演奏家支援を目的に立ち上げられた音楽団体、私立劇団を基に励まし活動を目的に立ち上げられた演劇団体など、立場や目的が異なっていた。また、担当する年間の活動件数も団体によってばらつきが見受けられた。構成員としてはコーディネーターの他に、活動に賛同する住民による地域スタッフや舞台や音響等の技術スタッフなど、人手や専門技術を補う役割を設ける団体も見られた。また、震災前に行っていた学校や福祉施設へのアウトリーチ活動で、コーディネーターに関する経験やノウハウ、活動者や受入先との繋がりを得ていた団体もあった。

c) 励まし活動の企画・運営・実施過程

活動者と受入先のマッチングから、活動の計画・準備、活動の実施とその後という過程が共通して見受けられた。各団体の特徴的な過程としては、事前の被災状況の把握、スタッフとの作業分担、過去の災害における活動経験談の聞き取りなどが挙げられた。

d) コーディネーターの工夫点・課題点

コーディネーター上の工夫点として、まず、常に受入先への配慮を念頭に置くことが挙げられた。受入先への配慮は、被災者の心理状況を考慮した活動や、継続的な実施に繋がる受入先の肯定的な姿勢の形成に寄与することである。また、報道された地域や被害の大きい地域に活動が集中してしまうため、被災地内での活動機会のバランスを考慮したマッチングが行われていた。そして、関係者間の情報共有や課題改善策の検討を目的として、密な連絡、活動後の反省会、報告会が実施されていた。

一方、課題点としては、まず、被災後に活動者の申出

が公共ホールへ集中してしまい対応に追われたこと、また、活動開始当初はコーディネーターの手法が確立せず受入先の状況と活動内容のマッチングが上手くいかなかったことなどが挙げられた。

被災者とのコミュニケーションに関しては、重点的に工夫が行われていた団体もある一方で、不足していたとして課題に挙げる団体もあった。

e) 活動者の工夫点・課題点

活動者が主として関わる過程として「活動内容の検討」と「当日の活動実施」に大別される。

まず、活動内容に関しては、音楽ジャンルでは数週間から数日という短期間で共演者や機材の検討、会場や被災者の情報、要望に基づく内容の検討をしていた。活動者の力量に合った選曲、数日後に依頼が来た場合に備えて前もって曲を用意しておくこと、普段のアウトリーチ活動でも行っている受入先の被災者の状況や依頼に応じた言葉遣いや服装、長々とした演奏ではなく短めの曲を複数入れて合計20～30分程度でまとめるといった飽きにくい時間設定といった被災者への配慮が強調された。

演劇ジャンルでは、まずは被災者の心境やその課題の変化に合わせた内容を行い、徐々に一般的に用いられる演劇的なコミュニケーションに移っていった。工夫点としては、数か所の決まった避難所で週1回程度の定期的な傾聴を重ねる中で被災者との関係性を構築するとともに、被災者の希望や必要だと感じたことを記録・共有し、それに基づいて内容を検討していた。

次に、当日の活動の実施方法に関しては、音楽ジャンルの活動者は、会場の雰囲気を読み取って演奏や司会の方向性の調整を行っていた。ただ、活動環境が十分でない場合が多いため、予想外な出来事にも対応できるように心の余裕を持つことやそれを見越した準備を心掛けていた。課題点としては、当日の実演は過去のアウトリーチ活動の知識や経験を積み重ねる中で習得できた一方、短期間で準備を行うという難しさが挙げられた。

演劇ジャンルの活動者は、主に傾聴活動や体操を行うが、その際、普段行っている演劇ワークショップという型の決まった活動ではなく、被災者の求めることに応えようと意識したことを工夫点として挙げた。また、継続的な訪問を行っていたため、多くの時間を割いて活動を行っており、活動の継続と生計を立てることの両立、継続するための根気が必要という課題が挙げられた。その対応策として複数人で活動を行うこと、活動者間での精神的な支え合いが重要であると述べていた。

3. 励まし活動の企画・運営・実施に関する知見と課題

2. のヒアリング調査で得た逐語録(各対象者10,000字～30,000字程度)から、励まし活動に関する知見と課題を抽出する。本研究の目的は、企画・運営・実施に関する知識と経験を知見や課題として体系化することにより、これまでの知見の活用と課題の解決策を踏まえた将来の

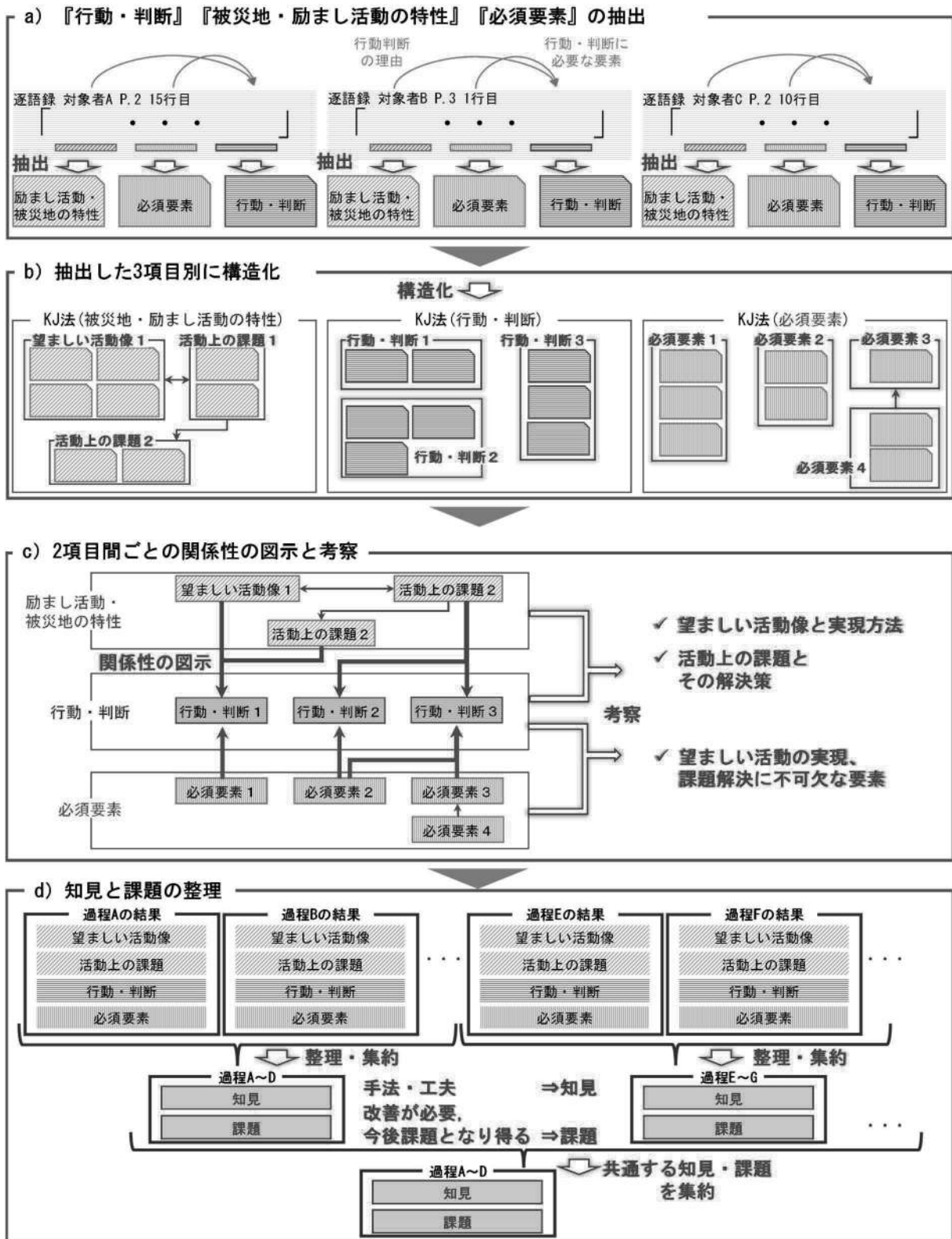


図-1 分析の手順

励まし活動に必要なことを明らかにすることである。ゆえに、知見の汎用性や課題解決策の検討も見据えた分析が必要である。よって、知見と課題の抽出にあたっては、企画・運営・実施方法の具体的な行動・判断のみならず、その行動・判断の理由となる出来事や考え方、行動・判断を可能にする要素も併せて抽出する。

(1) 分析方法

まず、準備として、活動過程の分類を行った。2. (2)c) で取り上げた過程について、各対象者が行っていた過程を時系列に分類・集約し、一連の流れとして整理した。(2)にて結果を示す。その後の分析の手順を図-1に示し、以下にて説明する。

a) 『行動・判断』『被災地・励まし活動の特性』『必須要素』の抽出

まず、逐語録から対象者が行った行動や判断を『行動・判断』として336件を抽出した。そして、普段の文化芸術活動とは異なる励まし活動の目的や課題、被災地特有の活動環境といった行動・判断の理由にあたる部分を『被災地・励まし活動の特性』として162件を抽出した。更に、被災者の情報や関係者の繋がりなど行動・判断に必要であったと考えられる事柄を『必須要素』として93件を抽出した。その際、文脈上関係性が見受けられる行動・判断、特性、必須要素を対応させて抽出した。その際、次のc)の手順で3項目間の関係性を明らかにするため、1つの出来事に共通した番号を抽出した3項目に付与した。具体的には、「災害時の励まし活動に対するニーズが分からなかったが、普段のコーディネーター間の繋がりがあったため、活動経験者の体験談を聞いて知ることができた」という出来事があった場合、被災地・励まし活動の特性として「災害時の励まし活動に対するニーズが不明」、必須要素として「普段のコーディネーター間の繋がり」、行動・判断として「経験者の体験談を聞いてニーズを知ることができた」の3項目を抽出する。その上で、その出来事を①とし、抽出した項目に①と付与した。

b) 抽出した3項目別に構造化

抽出した3項目をa)で明らかになった活動過程ごとに分類し、それぞれKJ法でカテゴリ化・構造化した。その上で、カテゴリを説明するラベルを付与した。ラベルについては、被災地・励まし活動の特性のカテゴリであれば、「需給バランスが取れていない」や「励まし活動に対するニーズが不明」というようなラベルを付与した。加えて被災地・励まし活動の特性については、構造化した結果から、対象者が励まし活動として望ましいと考える活動像と根本的な課題を見出した。

c) 2項目間ごとの関係性の図示と考察

そして、a)の逐語録の発言に基づく3項目間の関係性をもとに、特性と行動・判断、行動・判断と必須要素の2項目間ごとの関係性を各過程で図示した。その後、特性と行動・判断の関係からb)で整理した望ましい活動の実現と課題解決策に関する考察を行い、行動・判断と必須要素の関係から行動・判断に不可欠な要素に関する考察を行った。最後に考察した関係や要改善と判断した部分を追記した。

d) 知見と課題の整理

各過程で明らかになった特性、行動・判断、必須要素をまとめ、手法や工夫にあたる内容を知見、改善が必要、もしくは今後も課題となり得る内容を課題として整理した。その後、各過程で共通する知見・課題を活動全体の知見・課題として集約した後、解決策の検討を行った。

(2) 全体の活動過程

励まし活動の過程を携わる立場とともに整理した。活動の流れは、活動開始前の準備の過程、実際に個々の活

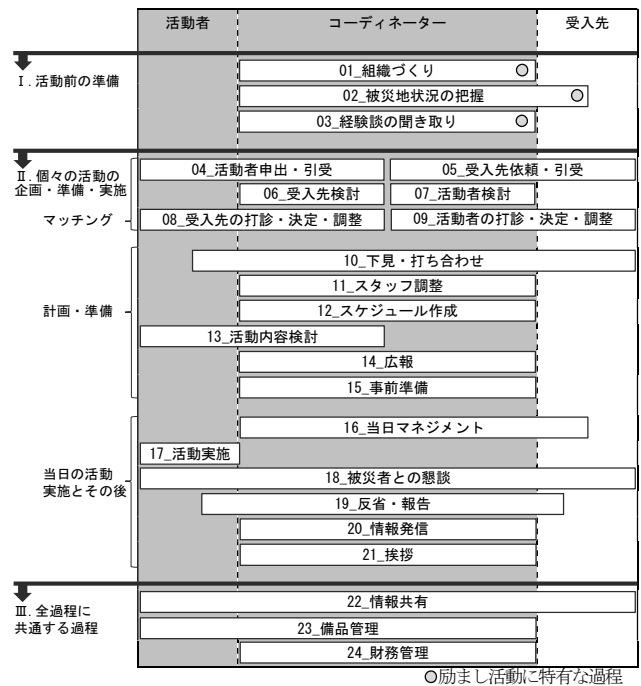


図-2 励まし活動の企画・運営・実施過程

動を企画・準備・実施する過程、それらの過程に関わらず複数の過程で共通して見られる過程の大きく3つに分類できた。更に、その3つの過程を細分化し、計24過程に分類した。(図-2) 基本的に大まかな流れ自体は普段の文化芸術のアウトリーチ活動と同様であるが、活動前の準備の過程は励まし活動特有の過程である。

活動開始前の準備では、組織づくり、被災地状況の把握、活動経験談の聞き取りを行う。組織づくりは、活動をコーディネート、実施するための体制を整える過程である。被災地状況の把握は、活動開始に踏み切るために、活動可能な状況かどうか、可能であればどんな受入先やニーズがあるのかを把握する過程である。経験談の聞き取りは、活動を実施、展開していく上での不安や悩みを解消すべく、過去に励まし活動の経験があるコーディネーターに対して行った聞き取りに関する過程である。

個々の活動を企画、準備、実施する過程については、大きく分けて、活動者と受入先のマッチング、実施に向けた計画・準備、当日の活動実施とその後の3つに分けられる。活動者と受入先のマッチングは、活動者の申し出から始まる場合と受入先の依頼から始まる場合の2つの流れが存在する。活動者からの申し出から始まる場合は、コーディネーターが申し出を引き受けた後、適した受入先の検討、受入先への活動打診、日程等の調整を行った上で受入先を決定する。既に依頼のある受入先が妥当な場合はその受入先へ打診するが、依頼がない場合には新たな受入先へ打診する。また、受入先からの依頼から始まる場合は、コーディネーターが受入先から依頼を引き受けた後、適した活動者の検討を行い、活動者への打診・調整・決定という流れとなる。

活動の実施に向けた計画・準備については、図-2中の

下見・打ち合わせから事前準備までの6過程が同時進行で行われる。まず、会場の確認や被災者の状況・ニーズ等の把握のために受入先との下見・打ち合わせを行う。基本的にはコーディネーターと受入先が参加し、場合によって活動者も同行する。その後、住民ボランティアのスタッフや舞台・音響スタッフが必要な場合には、コーディネーターが会場や活動内容、スタッフの都合を考慮し、スタッフの調整を行う。当日のスケジュールの作成も併せて行う。その後、活動者中心に、当日行う活動内容の検討を行う。そして、本番に向けた準備として、広報活動や事前に必要な準備を行う。

当日の活動では、コーディネーターが中心にマネジメントをし、活動者は励まし活動を行う。活動後には、被災者とのコミュニケーションのためにお茶会や談笑会を設ける場合がある。その後は、活動者やコーディネーターで反省を共有し、報告書の作成や所属団体や活動者への報告を行う。後日、外部に向けて活動報告などの情報発信や受入先への挨拶を行う場合がある。

最後に、全過程に共通する項目として3つ挙げる。各主体間での情報共有、活動に必要な備品などの管理、活動資金や報酬、謝金といった財務管理が行われていた。

(3) 各過程における知見と課題

被災地及び励まし活動の特性、行動・判断、必須要素についての構造化及び2項目間の関連性の考察によって得られた各過程における知見及び課題を表-3に示すとともに、以下で詳述する。

a) 活動前の準備

活動を開始する際の知見に関しては2点挙げられる。

1つ目は、普段の文化芸術活動におけるネットワークと活動時の連携の重要性である。対象地の熊本県には、文化芸術に関するアウトリーチ活動や情報誌の作成などの普段の文化芸術活動で培われた、自治体や地域の文化ホール、学校といった受入先との繋がり、更にはコーディネーター間の繋がりがあった。この繋がりは表-3の01_組織づくりのコーディネーター間の支え合いや受入先との連携、02_被災地状況の把握の被災地状況の確認、更には06_受入先検討及び07_活動者検討の受入先と活動者のマッチングなど、様々な過程で必須要素であり、励まし活動において重要な要素であることが明らかになった。

また、県立劇場では『連携』の考え方が普段から重視されていた(表-3 01_組織づくり)。その意義は分業による負担軽減だけでなく、受入先との信頼関係づくりや励まし活動に対する受入先地域の能動的な姿勢に繋がると考えられる。つまり、普段から受入先との連携を重視した文化芸術活動と、それを通したネットワークの構築を行うことが重要であると考えられる。

2つ目は、活動経験者の経験談やアドバイスの有用性である。4団体中3団体が活動開始前に東日本大震災時の活動経験者の経験談を聞いていた。コーディネーターらは励まし活動の経験がなく、活動に対するニーズが分から

ず、不安があったため、経験談は活動方針や活動内容の参考になった他、活動を進める後押しにもなっていた。他の過程でも必須要素になっており、活動経験者の経験談やアドバイスは有用であると明らかになった。被災後は勿論、普段から経験談や知見を共有する機会を設けることが重要であると考えられる。

一方、課題に関しても2点挙げられる。

1つ目は、コーディネートに関する議論・制度の不足である。次項以降で述べるが、1つの支援活動のマネジメントという視点から見て、コーディネーターは重要な存在である。一方、復興復旧全体において活動自体の優先順位が決して高くないため、コーディネーターの立場を認める考え方や制度は成熟しない傾向にある(表-3 03_経験談の聞き取り)。そこで、励まし活動の重要性やコーディネートに関する議論を行うことで、文化芸術関係者や行政、他の支援団体の中で認識をすり合わせ、知見の共有や連携制度、有償制度などコーディネートに必要な制度を設けることが強く求められる。

2つ目は、地域内のネットワークと連携の不足である。先に述べたが、熊本県では以前からアウトリーチ活動や情報誌の発行などが行われたり、受入先との連携が重要視されていたりした。その結果、情報把握を行う際の多様な窓口への伝手(表-3 02_被災地状況の把握)、後述する受入先検討時の繋がりが作られていた。更に被災範囲が限定的であり、必須要素である地域のネットワークや連携が比較的満足されていた。ただ、熊本県以外の地域で同様のネットワークや連携する慣習があるとは限らない。そのような地域では、先の知見で挙げた、普段から受入先との連携を重視した文化芸術活動とネットワークの構築を行う必要があると考える。

b) 個々の活動_マッチング

活動者と受入先のマッチングに関する知見としては、マッチングの方法が挙げられる。3(2)で示したが、マッチングは、活動者からの申し出に対し受入先を検討する場合と受入先の依頼に対し活動者を検討する場合がある。その受入先ないし活動者を検討する際には、活動ジャンルによって異なる目的と活動内容それ自体に対して、受入先のニーズと状況が合っているかどうか、バランスよく活動機会が取れているかどうかの大きく2点を考慮されていた(表-3 06_『受入先検討』)。その判断は、被災前のコーディネート経験や活動中の試行錯誤をもとに、活動者間の繋がりにから得た他の活動者に関する情報や、地域内の繋がりにから得た受入先の情報を使って行われていた。このことから、活動者と受入先の適切なマッチングを行うためには、普段からコーディネートが必要な事業を展開し経験や繋がりを作るとともに、実際に励まし活動を実践することが有用であると考えられる。

一方、課題に関しては3点挙げられる。

1つ目は、被災地域の包括的な活動の需給調整である。熊本地震後に対処されたが根本的な解決がなされなかつ

表-3 特筆すべき3項目間の関連

企画・運営・実施過程 大分類	活動の理想像・課題となる 『被災地・励まし活動の特性』	特性を成因とする 『行動・判断』	行動・判断に関する 『必須要素』	
I 活動前の準備	01_組織づくり	連携の重要性 関係主体との連携 コーディネーター間の支え合い	信頼関係のある関係主体との繋がり	
	02_被災地状況の確認	被災状況によって異なる受入先の窓口 様々な組織・受入先の状況を把握 (行政、学校、福祉施設、仮設住宅 等)	複数の受入先窓口との繋がり	
	03_経験談の聞き取り	未経験者は活動のニーズやその変化の仕方、最適な活動方法が不明 経験談は活動方針・内容の参考、後押し	コーディネーター間の繋がり	
マッチング	04_活動者申出・引受	県外の活動者は被災地の情報・繋がりが少ない 励まし活動に不案内な自治体に活動申出	活動申出の受け皿に関する制度 コーディネーター間の繋がり	
	06_受入先検討	活動内容の適性に基づいた活動が望ましい 活動の需給バランスが取れない	普段のコーディネートにおける経験・知識 励まし活動中に得られた知見・経験 普段の行政・受入先との繋がり 他団体の励まし活動の実施に関する情報 活動数のバランスの考慮 過去の災害における活動経験談	
	07_活動者検討	受入先には活動内容に対する要望がある 活動者によって対応可能な内容が異なる	受入先に合った活動者の検討 活動者の積極的な姿勢 多様性に富んだ多くの活動者との繋がり	
	08_受入先打診・決定・調整	受入先によって励まし活動への積極性や体制が異なる	受入先責任者の励まし活動への姿勢の考慮 受入先の活動受け入れ態勢の整備	
II 個々の活動	10_下見・打ち合わせ	交渉上の困難がある	普段のコーディネートを改善した方法で下見・打ち合わせ コーディネーター経験に基づいた考え方・ノウハウ 専門分野の視点に立った活動者への理解 活動中に自ら得た経験・能力	
	11_スタッフ調整	活動内容によって必要な活動環境が異なる	活動内容に基づいて技術スタッフを検討 技術を持った舞台・音響スタッフの存在	
	12_スケジュール作成	コーディネーターの人手不足 既存のコーディネーターの方法が励まし活動のコーディネーターにおいても有用	地域スタッフと分担して作成 既存のコーディネーター手法・流れをもとに作成	
	計画・準備	13_活動内容検討	仲介者の重要性 活動者によって対応可能な内容が異なる ジャンル・活動型の適性が異なる	活動者とコーディネーターで分担して検討 活動者が活動中に得た経験 活動者が持つ能力(柔軟性、内容検討力) 活動者の活動に対する積極的な姿勢
		14_広報	被災者・受入先と活動者双方にニーズあり 受入先に活動条件・制限あり	コーディネーターの通常時の活動で得た知見・経験 コーディネーターが経験者から得た知見 コーディネーターが活動中に得た知見・経験 コーディネーターで得た情報
実施	17_活動実施	不十分な受入体制への対応と継続的な活動のため、受入先へ負担を無くすべきであるという考え方 活動は被災者を公の場に誘い出すきっかけになるという経験	自らボスティングや掲示を実施 受入先の無理な集客はしないように伝達 仮設住宅では戸別に声かけ・勧誘	
	18_被災者との懇談	各ジャンルで目的が異なる 心のケアが必要な被災者がいる	ジャンルごとに異なる形式で実施 例) 演劇：傾聴・演劇ワークショップ 音楽：鑑賞型、ダンス：参加型	
	19_反省・報告	被災者とのコミュニケーションが重要 活動環境が不十分	傾聴 コーディネーターと活動者で反省・改善	

た課題である。まず、その原因となる課題が大きく2つ考えられる。1つ目は全体の活動者の受け皿がないこと(表-3 01_組織づくり)、2つ目は報道量や受け入れ態勢によ

って地域や施設ごとに活動数に偏りが生じること(06_受入先検討、08_受入先打診・決定・調整)である。この課題に対しては、各団体が活動者の受け皿になり、活動が

少なく、受け入れ態勢の整っていない地域・施設への活動提供を意識して行っていた。しかし、その判断は各団体が逐次行っており、物資支援の拠点やボランティアセンターなどのように被災地全体で支援を受け、配分する機能はなかった。そのため、文化芸術に不案内な自治体への活動者の申し出の集中、コーディネーターを通さない活動の偏りが発生したと考えられる。よって、申出の受け皿設置や活動数のバランスの達成には、被災地域の包括的な活動の需給調整が必要であると考えられる。

2つ目は、活動者及び受入先との繋がりである。活動者と受入先の検討には、それぞれとの繋がりが重要であった(表-3 06_受入先検討と07_活動者検討)。特に受入先との繋がりは、受入先の確保だけでなく、ニーズの発見や後述する下見・打ち合わせにも影響することが明らかになった。つまり、普段からの活動者や受入先との繋がりが重要である。地域のネットワークが弱く、文化芸術が盛んでない地域もあるため、全国的な視点で見ると課題であると考えられる。

3つ目は、受入態勢の整備である。受入先によって励まし活動に対する姿勢や受け入れ体制が異なっていた(表-3 08_受入先打診・決定・調整)。具体的には、励まし活動に否定的な受入先や受け入れの調整が難しい受入先がある一方、励まし活動に積極的な受入先では担当者や申請制度が整っている受入先があるなど、受入先の状況が一律ではなく、活動の偏りにも影響していると考えられる。受入先の状況や責任者によって方針が異なることを踏まえると、一概に励まし活動の受入に積極的であるべきとは言えない。ただ、受入への負担や受入先の制度によって活動を受ける機会が損なわれる状況は避けるべきである。そのためには、受入先に負担のない一律の受入方法の導入や、自治体や教育委員会、避難所や仮設住宅の管理団体などに受入先の代表窓口を設置することなど、受入態勢の整備が課題であると考えられる。

c) 個々の活動計画・準備

計画及び準備を行う際の知見は4点挙げられる。

1つ目は、コーディネーターの経験・知識とノウハウの有用性である。計画・準備で主要な過程である、表-3 10_下見・打ち合わせ、12_スケジュール作成、13_活動内容検討において、普段の文化芸術活動で培ったコーディネートもしくはイベントの企画に関する経験やノウハウ、文化芸術に関わる知識が必須であったことが明らかになった。具体的には、下見・打ち合わせや当日における工程・流れの検討、下見チェックシートや企画書などの作成、活動内容に対する意義や参加者の反応の想定、文化芸術の扱いなどが該当する。ゆえに、普段のコーディネート経験や知識、ノウハウは震災後の励まし活動におけるコーディネートにも有用であり、そのような人材やその方々が持つ知見は励まし活動において重要な存在であると考えられる。

2つ目は、受入先や被災者に関する情報取得と共有の重

要性である。活動ジャンルごとの目的の達成や受入先の活動条件への対応のために、受入先の状況や被災者の年齢や様子に関する情報に基づいた検討をしていた(表-3 13_活動内容検討)。後述する活動ジャンルごとに異なる目的に注目すると、音楽ジャンルは鑑賞を主として心を豊かにすることを目的とした活動のため、被災者の年齢ごとの嗜好やリクエストなどといった情報が重要となる。一方で演劇ジャンルはコミュニケーションを主として被災者の心やコミュニティの課題解決を目的とした活動のため、地域スタッフからの地域住民の情報、コーディネーターによる受入先担当者への聞き取りから得られる受入先のコミュニティに関する状況や課題についての情報、更には活動者自ら傾聴活動を通して得られる被災者の課題や要望に関する情報など、各主体が持つ多層的な情報が重要となる。また、受入先の活動条件に関しては、会場の活動環境によって実施可能な活動内容が異なるため、下見や打ち合わせで得た受入先に関する情報が重要となる。ゆえに、活動目的や条件を満たすための多面的かつ多層的な情報は、各主体の情報取得の慎重な積み重ねと10_下見・打ち合わせや後述する17_活動実施、22_情報共有で明らかに合った下見チェックシートや傾聴記録などといった共有手段が重要であると考えられる。

3つ目は、受入先や被災者への配慮の重要性である。励まし活動の継続のために、活動後も受け入れられるよう受入先と被災者へ負担をかけない配慮を最重要視していた(表-3 10_下見・打ち合わせ、14_広報)。具体的には、被災者との距離に配慮した会場設置、自主的な広報などを行っていた。また、前項の受入先打診でも、同様に受入先へ負担をかけないような交渉の仕方を行っていた。ゆえに、活動の継続のためには、ニーズに応えた活動や、一方的な活動を行わないだけでなく、受入先の担当者や被災者に負担のない活動の提供ができるように配慮することが重要であると考えられる。

4つ目は、スタッフの役割の有用性である。表-3 12_スケジュール作成や前述した01_組織づくり、後述する16_当日マネジメントにおいて、活動数の多いくま100では作業の分担や地域に密着した作業に対して、ボランティアの地域住民のスタッフを設けて対応していた。また、11_スタッフ調整、12_スケジュール作成、前述した01_組織づくりにおいて、舞台や音響に関する技術スタッフを有する県劇では、万全でない場合が多い活動環境を整えるべく技術スタッフを活用していた。どちらも人手としてのみならず、地域に密着した存在、活動環境の整備に長けた存在という専門スタッフでもあることから、より効果的な活動の実施やコーディネーターのマッチングや計画への専念にも繋がると考えられる。ゆえに、万全でない環境下で多くの活動のコーディネートが必要な場合においては、コーディネーターのみならずスタッフの役割を設けることも有用であると考えられる。

一方、課題に関しては、活動の試行が挙げられる。被

災後励まし活動を繰り返し行う中で得た経験が必要であった(表-3 10_下見・打ち合わせや13_活動内容検討)。事例として、移住したばかりでコミュニティが形成されていない仮設住宅の被災者に対して、その場で一緒に盛り上がる内容の大道芸の活動を行ったことで、被災者を戸惑わせてしまったという失敗談があった。一方で、受入態勢が整い、頻繁に励まし活動が実施されるようになった学校では、励まし活動という非日常の体験が続いたことでストレスの一因になってしまっていたという事例も確認できた。いわゆる肌で感じることでしか得られない、受入先で異なるコミュニティや被災・復興状況の違い、更にはそれらに応じた活動内容や実施頻度、交渉方法の違いがある。普段のコーディネート経験と被災者や地域の情報のみならず、実際に活動を試行する中で得られることも非常に重要なことから、今後の被災地での活動においても困難ではあるが重要であることを念頭に進める必要があると考える。

d) 個々の活動_実施

当日の活動実施の際の知見は2点挙げられる。

1つ目は、励まし活動の意義の多面性である。活動の側面とその意義を以下にまとめた。

- 被災者の心を豊かにすること(音楽の鑑賞)
- 塞ぎがちな被災者の外出のきっかけづくり(広報)
- 被災生活のストレス発散や周囲と合わせる楽しさを感じてもらうこと(ダンスの体験)
- 被災者の悩みや不安の聞き出し(被災者との懇談)
- 被災者やコミュニティが抱える心の課題の解決(演劇的手法を用いたコミュニケーション)

上記のように、被災者が抱える問題や状況変化に応じた多様な意義を持つ活動であることがわかった。

2つ目は、反省と改善の繰り返しの重要性である。前項の課題で述べたが、活動を繰り返す中で得られた経験によって、より望ましい活動が実現されていったことが明らかになった。そのためには、活動者を含めて団体内で反省の機会を持ち、改善策を検討する過程が重要であった(表-3 19_反省・報告)。

一方、課題に関しては、励まし活動の意義を踏まえた活動が挙げられる。活動者からは、漠然と「被災者のために何かできないか」という申出が多くあったという話があり、実際に活動者からそのような思いで活動に臨んだという話も得られた。つまり、震災時に文化・芸術活動に何が求められ、どんな意義があるのかということが活動者自身掴み切れなかった状態であったとも考えられる。活動の企画を行ってきたコーディネーターでさえ、経験を頼りに試行しながら掴んで行ったとの話も伺えた。ゆえに、今後の活動においては、励まし活動の意義を踏まえた上での活動を行うため、ある程度の経験や活動経験者のアドバイスが必要になることが考えられる。更には、上記の知見で述べたように被災者や地域のニーズや状況に応じた活動の実施が望ましいとすると、よりコー

ディネーターのような第三者による活動の振り分けが必要であると考えられる。

e) 全過程共通

各過程において、関係者間の情報共有や物品・財務管理など、一般的に組織が企画・運営・実施を円滑に進めるためには必要となる手続きが取られていた。

(4) 活動全体における知見と課題

熊本地震後の活動例における知見と課題について、普段のアウトリーチ活動との比較とともに整理する。

a) 知見

励まし活動やその企画・運営・実施の基礎となる考え方、活動に取り組む上で必要不可欠な重要な点、更には活動を進める上で有用な点の大きく3つに分けて知見を説明する。

基礎となる考え方として、2点が明らかになった。

1つ目に、本研究のテーマである励まし活動の意義について、実際に活動の企画・実施に携わるコーディネーターと活動者の視点から明らかにした。(3)d)で述べたように、励まし活動は一義的ではなく、励まし活動の活動ジャンル及びその効果を与える側面によって異なっていた。つまり、励まし活動は活動ジャンルやその側面による多義性によって、被災者の心やコミュニティの復興の課題の幅広さや変化に対応することができると考えられる。

2つ目に、活動者と受入先のマッチングは、コーディネーターにおいて非常に重要な役割であるといえる。なぜなら、活動者と受入先のマッチングは、(3)b)で述べたように、上記の励まし活動の意義を満足すること、そして活動者の申出及び受入先の依頼の受け皿となり活動の需給関係の調整を行うことの2点において必要であるからである。そして、同じく(3)b)で述べたように、そのマッチングは、文化芸術活動における地域内の繋がり、受入先・活動者等に関する情報を用いて、コーディネーターが持つ知見や経験により実施される。今回対象とした熊本県は地域内の繋がりが形成されていた他、情報の取得やコーディネートの知見や経験について多くのコーディネーターが行っていたため、マッチングの機能を持つことができたと考えられる。

次に、活動に取り組む上で必要不可欠な重要な点について下記の4点明らかになった。

1つ目に、普段の文化芸術活動におけるネットワーク、受入先や被災者に関する情報取得と共有は、特に活動者と受入先のマッチングと活動内容検討において重要であり、上記で述べたが本対象地では比較的満たされていた。

2つ目に、活動時の連携は、作業の負担軽減や受入先との関係づくり、(3)a)で述べたように、受入先も能動的な活動を実現するという役割を持っており、熊本県の公立ホール間において連携の慣習があったため実現していた。

3つ目に、活動の反省と改善は、経験による部分も大きく、活動環境が十分でなく臨機応変が必要な励まし活動では重要であり、反省会や報告によって実現されていた。

4つ目に、受入先や被災者への配慮は、励まし活動の継続のために重要であり、受入先の担当者や被災者に負担のない活動の提供を常に念頭に置いて活動を行っていた。

更に、活動を進める上で有用な3点が明らかになった。

1つ目に、活動経験の無いコーディネーターにとって、活動経験者の経験談やアドバイスは有用であり、過去の活動経験者との繋がりによって実現されていた。

2つ目に、コーディネーターの経験や知識は受入先検討や活動内容の検討など多くの過程で有用であると考えられる。今回対象のコーディネーターは6人中5人が経験者であったため、経験や知見が比較的多く反映されていた部分が多く見られた。

3つ目に、今回対象とした団体では地域のボランティアスタッフと技術スタッフの2種類の役割が挙げられ、万全でない環境下で多くの活動を実施する必要がある際に有用であると考えられる。地域スタッフは活動への賛同者を集められたこと、技術スタッフは公立施設の職員として勤務していたことが要因である。

b) 課題

熊本地震後では解決されていたが今後他の地域では解決が難しいと考えられる課題、更には熊本地震後において改善が必要だと考えられる課題の大きく2つに分けて説明する。特に、課題の原因や解決策に着目して述べる。

まず、熊本地震後では解決されていたが今後他の地域では解決が難しいと考えられる課題について、下記の3点明らかになった。

1つ目に、励まし活動の意義や特性を踏まえた活動の実現が挙げられる。励まし活動はその多義性により、被災者の心やコミュニティの復興に関する課題の幅広さや変化に対応できると前項で述べた。その意義や特性を踏まえて、受入先の情報に基づいて適切な組み合わせが実現されなければ、活動の意義が損なわれるのみならず、被災者や活動者に対して悪影響を及ぼす可能性も考えられる。実際に、活動者やコーディネーター自身でさえも経験談を聞き、試行錯誤する中で活動の意義を理解していた。よって、コーディネーターと活動者は励まし活動の意義や特性に関する知見の理解が必要であると考えられる。

2つ目に、活動者と受入先との繋がりに関しては、活動者と受入先のマッチングや活動内容検討など多くの過程で必須要素として挙げられた。上記の知見で述べたように、熊本県内では普段からアウトリーチ活動などといった文化芸術活動や公立ホール間の連携が取れていたため、双方の繋がりが強いという特性を持っており、十分な繋がりを持つことができていた。だが、地域によってはネットワークが築けていない地域もあると考えられるため、そのような地域では普段の文化芸術の活動の推進などによって関係性を築くことが必要であると考えられる。

3つ目に、上記の知見の反省と改善の繰り返しにおいて述べたが、励まし活動の特性上、経験による部分も大きいいため、試行の繰り返しは避けられない課題である。

また、熊本地震後において改善が必要だと考えられる課題として、下記の3点が明らかになった。

1つ目に、被災地域の包括的な活動の需給調整については、被災地域に対してバランスのとれた活動の配分が望ましいものの、活動者の申し出に対して公式な受け皿がなかったことや報道の偏向や受け入れやすさによる活動の集中により、役所への申し出集中や活動の需給の偏りなどが生じていた。よって、被災地域の包括的な活動の需給調整を行う解決策として、災害支援ボランティアや物資支援といった他の被災者支援のように、支援の受け皿と活動数のバランスを考慮して配分する拠点が必要だと考える。

2つ目に、受入先によって受入態勢の構築が異なっていたおり、それによって受入先によって活動機会に偏りが生まれてしまうという問題が挙げられた。よって、一律の受入方法の導入や避難所や仮設住宅の管理団体などに受入先の代表窓口を設置するなどの解決策が考えられる。

3つ目に、これまで述べた知見の活用や課題の解決策の実行を行うには、事前に励まし活動のコーディネートに関する議論や制度の検討を行う必要がある。最近コーディネーターの立場は認められつつあるが、被災地全体で活動をマネジメントするという考え方は浸透していない。また、復興・復旧において決して優先順位が高いというわけではないため、コーディネートに関する議論や制度が成熟しづらい。よって、(3a)で述べたように、事前に関係主体での励まし活動やコーディネーターに関する認識のすり合わせや知見の共有、制度の整備が必要である。

4. まとめ

本研究では、コーディネートされた励まし活動を対象とし、企画・運営・実施に関する知識と経験を体系的に整理し、励まし活動を実施する上での知見と課題を明らかにすることを目的とした。熊本地震後において励まし活動を実施したコーディネーターと活動者に対してヒアリング調査を行い、得られた逐語録の分析を行った。

結果、活動全体の流れである24の活動過程に加え、各過程における被災地と励まし活動の特性、コーディネーター及び活動者の行動・判断、それを行う上での必須要素について分類と各項目間の関係が明らかになった。更に、分析に基づいた考察により、熊本地震後の励まし活動における知見と今後の活動上の課題を明らかにした。

(1) 提言

3. の結果より、今後の励まし活動の展開に向けて必要だと考える3つの提言を以下にまとめた。

a) 過去の励まし活動に関する知見・課題の事前共有

本調査の対象であるコーディネーターと活動者の多くが熊本地震後の活動が初めてであり、活動を行う中で試行錯誤、改善を行いながら活動を行っていた。また、コーディネーターの中には東日本大震災の活動経験者から聞き取った経験談やアドバイスをもとにした方針で活動

を行っている方も見受けられた。更には、分析により得られた知見や課題には、より困難が少なく有意義な活動を展開するために事前に共有すべきことも挙げられた。

よって、活動経験者の知見及び課題を全国各地のコーディネーターや活動者などの文化芸術関係者に事前に共有しておくことが重要であると考え。そのためには、未経験者が励まし活動に対する関心を持ち、不安感を払拭できるように経験者が励まし活動の意義を発信する他、関係者の日々の繋がりを大切にすることが重要であると考え。

b) 励まし活動の必須要素を加味した普段の文化芸術活動の展開

得られた知見と課題では、コーディネーターと受入先・活動者の繋がりにから得られるネットワークやコーディネーターの経験・知識、3. b)で述べたコーディネーターの立場確立など、主にアウトリーチ活動などの普段の文化芸術活動により培われる要素が多く見受けられた。

よって、通常時にアウトリーチ活動を行う際には、上記の要素の励まし活動における重要性を念頭において取り組むことが有用であると考え。

(2) 今後の課題

本研究における今後の課題について以下にて述べる。

- 調査、分析を1名で行ったため、得られた結果は主観に依る部分が多い。よって、項目の抽出やKJ法においては複数名による実施が好ましいと考える。
- 本調査では、熊本地震後に行われた音楽・演劇ジャンルの活動を対象活動、コーディネーターと活動者を対象者としており、対象が限定的であるため、捉えきれない課題もあると推測される。スポーツや演芸などを加えて多様な励まし活動を対象とするほか、栗田(2006)が指摘したように被災者支援活動において受入側の観点は重要であるため、受入先や被災者を含めた活動に関わる各主体の視点を取り入れることで、より一般的、多角的な結果を得ることが必要である。
- 過去の活動をヒアリング調査で明らかにする手法を採った。ゆえに、データはコーディネーターと活動者が認識した情報のみをもとに作成したため、活動を企画・実施する様子を観察調査により把握する必要がある。
- 提言は抽象的な言及でとどまっており、知見や課題を活用し、想定に基づいた具体的な解決策に関する検討まで行えると望ましいと考える。

謝辞: 熊本県立劇場、芸術の都ACTくま100、Comodo arts project、SASHIYORI Art Revival Connection KUMAMOTOをはじめとするコーディネーターと活動者の方々にヒアリング調査にご協力いただいた。関係された全ての方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 門倉慧・梅本通孝 (2021), 被災地における励まし活動の実態把握—いわき市の地域紙を用いて—, 地域安全学会論文集, No.38
- 栗田暢之 (2006), 災害ボランティアが果たした役割と今後の課題, 災害情報, Vol.4, pp.23-28
- 中村美亜 (2016), 「文化力」とは何か?: 東日本大震災後の「音楽の力」に関する学際研究が示唆すること, 文化政策研究 = Cultural policy research : journal of the Japan Association for Cultural Policy Research, No.10, pp.30-48
- 秋山由衣 (2016), 東日本大震災後の復興支援としての音楽活動: 仙台フィルハーモニー管弦楽団と「音楽の力」による復興センター・東北」の活動を事例として, 音楽研究: 大学院研究年報, Vol.28, pp.85-93
- 中村美亜 (2014), 東日本大震災をめぐる「音楽の力」の諸相: 未来の文化政策とアートマネジメントのための研究1, 芸術工学研究, No.21, pp.13-29
- 門倉慧・梅本通孝 (2022), 熊本地震後の励まし活動における実現過程の把握, 日本災害情報学会第24回学会大会予稿集
- 本多康生 (2018), 足湯ボランティアのエスノグラフィー: 熊本地震の被災地から, 福岡大学人文論叢, Vol.50, No.2, pp.309-353

(原稿受付 2022.12.15)

(登載決定 2023.8.22)

Knowledge and Issues Related to the Planning, Management, and Implementation Methods of Hagemashi-activities after the Kumamoto Earthquake

Satoshi KADOKURA¹ • Michitaka UMEMOTO² •

¹Water Management Division, Tokyo Head Office, TOKEN C.E.E. Consultants Co., Ltd.
(kadokura-s22@tokencon.co.jp)

²Faculty of Engineering, Information and Systems, University of Tsukuba (umemoto@risk.tsukuba.ac.jp)

ABSTRACT

In order to clarify the process and elements necessary for activities by focusing on the planning, operation, and implementation process in *Hagemashi*-activities, and by systematically organizing the findings and issues, we conducted interviews with coordinators and activists who implemented activities after the Kumamoto earthquake. As a result, in addition to the specific flow of activities from planning to implementation, we clarified the findings and future issues in the post-earthquake encouragement activities based on the relationships among three items: characteristics of the affected areas and encouragement activities, actions and judgments of coordinators and activists, and essential elements in conducting such activities.

Keywords : *encouraging the victims, culture and artistic activity, coordinator, artist, the Kumamoto earthquake*